

# カルガモ

*Anas poecilorhyncha*

カモ科・夏鳥（一部越冬）

## 名前の由来

万葉集の歌でうたわれた「軽ヶ池」からきたといわれる。単にカルと呼ばれる。色が泥のようなので泥鴨とか、夏にもいるので夏鴨とも呼んだ。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説や「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：軽鴨



カルガモ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）61cm。オスもメスも同じ色。体は褐色で黒褐色の斑がある。頭の前部から頭頂を通して首の後ろまで髪の毛のように黒褐色。顔は淡い色で特徴のある2本の黒い線が走る。翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）は青色。足がオレンジ色、くちばしは黒く、先が黄色い。

声：オスもメスも「グェッ、グェッ」という濁った声で鳴く。水面から飛び立ったときには、たいていの場合「グェッグェッグェッ」と鳴き交わし、飛んでいるときにも同じように鳴くことがあるという。

類似種と区別点：マガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモのメス。

マガモのメスはくちばしが黒くて周囲がオレンジ色、青色の翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）の上下に2本の白線があり、尾は白っぽい。

オカヨシガモのメスは少し小さくて、次列風切（翼後縁の

中程の羽）が白く、足は黄色。

ハシビロガモのメスはくちばしが大きく、雨覆（翼上面の体よりの羽）の色は青灰褐色。



カルガモ。くちばしの先が黄色い。顔の様もくっきりしている



マガモのオス（左）とメス。マガモのメスのくちばしは周囲がオレンジ色

## 生息環境・分布

河川、湖沼、水田、湿地、干拓地、干潟など。繁殖期には草むらや藪の多い水辺に多い。十勝では主に夏鳥だが、越冬するものもいる。

分布：ユーラシア大陸東部のバイカル、ウスリー地方から中国を経てインドまで繁殖分布し冬は東南アジアまで渡って過ごすものもある。

日本全土に分布し、本州以南では留鳥として一年中いる。

北海道（十勝でも）では夏鳥で繁殖する。河川や湖沼に生息する。都市の公園で見られるカモ類ではマガモに次いで多い。北海道東部ではマガモに比べると少ない。

十勝では、主に夏鳥として主に河川の中～下流に飛来し繁殖するが、帯広川下流などで少数が越冬している。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南 (越冬期・通年)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
繁殖						■	■	■	■	■	■	■
一部越冬											■	■

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

雑食性。草の葉・茎・種子などを主に食べ、水生昆虫や貝なども食べるという。

湿地を歩きながらついでに、草の穂をくわえてこそぎ落としたりする。また、水草のある岸辺の水面に浮き、首を伸ばしてくちばしを水面に置くようにしてグチャグチャと動かし、こしとるように採餌する。あるいは浅い水面で

首を水中に入れたり、逆立ちするように上半身を水の中に入れたりして、水底の植物をとりもする。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～7月。12月から翌2月頃につがいが形成され、一夫一妻で繁殖する。つがい形成時には複数のオスがメスに求愛するグループディスプレイ（集団誇示行動）がみられる（→興味深い話の項参照）。つがいは産卵後抱卵期に解消されるという。

巣は水辺近くの草むらや藪の下で乾いた地上に作られるが、水辺から離れた場所に作られることも多いという。浅いくぼみに草の葉などを敷いた皿形。メスだけが作る。

10～12個の卵を産み、抱卵日数24日～26日、メスだけが抱卵する。カモ類は間をおかずにふ化し、親とともに一斉に巣から離れる。



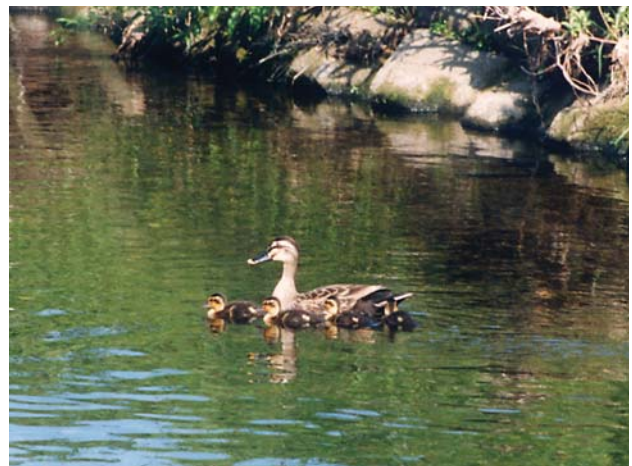
カルガモの親子。ヒナの面倒はメスだけがみる

## 興味深い話

- 標識調査で7年11ヶ月生存という記録がある。
- 冬は群れをつくり、大きい開水面では大群になる。
- つがいの形成時の12月ごろから翌年2月ごろには、オスの求愛のグループディスプレイ（ディスプレイ：メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）が見られる。2～10羽くらいのオスが集まり、1～2羽のメスの周りを泳ぎ回る。そして頭を上げて急に縮め、尻を上げるという動作を行う。
- 繁殖期にはつがいとなって分散するが、小さい島や湿地などで、しばしばコロニー（集団営巣地）状に多数のつがいが集まって営巣することがある。
- 真冬に決まったつがいもメスが卵を抱く頃には解消される。初夏にヒナをたくさん引き連れているのは母ガモである。巣から水辺にヒナを連れて行く際、普通は歩かせて行くが、親鳥がヒナを1羽ずつくわえたり、体にしがみつかせたりして飛んで運ぶという観察例もあるという。また急

流を泳ぎ渡る際、ヒナは親の上流側に密集していくという。

- 十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



カルガモの親子

## 配慮事項

繁殖には草むらや藪の多い水辺が必要である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ、主婦と生活社 1997  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994増補版7刷）  
「野の鳥の生態 復刻版 1～5巻」仁部富之助、大修館書店 1979  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ